

# 立命電友会

## 「電気工学の歩み そして余生を朗碁で!!」

衣笠三一会 中井信治  
(昭和三十一年卒)



一、学生時代の思い  
戦後七年目と云えば復興には未だ遠くインフレがすさまじく、テレビが無い時代の入学であった。高校普通科卒業の私にとっては、多くの学生がラジオや音響アンブの組立、電検資格取得、又電力会社勤務者など、何故電気工学の道を選択したのか戸惑いがあった。唯、高校時代は数学が得意で、日本の将来を考えると、テレビを始め家電機器や電動工具、鉄道の電化などあらゆる分野に電気の輪が広がって行くと思った簡単な動

機から専攻したものである。

従って教科の電気実験、通信(無線)工学分野は正直なところ大変苦手であった。

しかし、電気理論(山本先生)、電磁気学(上林先生)、電力工学(羽村先生)の講義や文献をみる限り殆どが数学的解析となつて居り、私はこの道が進路と決めつけていた。

① 音響アンブの組立と同手作りで吸音材入り木製、msスピーカーの製作で音域、音質では苦労させられたものである。

② 渡辺先輩の薦めで、先斗町の鴨川おどり、上七軒の北野おどりの舞台照明のアルバイトを行っ

た。暗転からの迫上がり炭素電極アーク放電をレンズで集光する照明、又舞台の全体情景をスライド抵抗器で明暗化したり時には嵐や雷雲の発生、更には三日月の登陸、すすきに微風を与えるなど小道具役も行った。従って競艇、家庭教師のアルバイトを取り止め、日当が二、四倍高価な照明を春休みと土日祭日に行った。因みに素うどん十円、奨業料月額八百円の時代で私は奨学資金を取得し十七年間で償還する事になっていた。

次に、卒論のテーマは「電力系統の直列コンデンサ投入による安定度について」で、殆どが数学が活かされた数値解析と我が国及び各国の実施例による検証であった。多くの文献は羽村先生の他、京大の林先生の文献及び日新電機実習時に入手した文献をベースに、電力中央研究所での模擬送実験結果を纏めたもので、山本・羽村両先生のご指導を改めて感謝申し上げる次第である。

### 二、産学協同研究

次記三大テーマについて立命館大学と協同研究を行った。

① 電力用コンデンサの開閉サージ現象について  
② 衝撃電圧発生装置(IG)異常波形の研究  
③ 衝撃電流発生装置(ICG)用電力コンデンサの開発

特にコンデンサの超低インダクタンス化、低抵抗化及び充電エネルギー密度の高い商品開発いずれも山本、羽村、辻村先生の多大のご協力を得て、ニチコン

株として商品化した。そしてこれからの分野に於いては、お陰様で幾多の特許、実用新案を取得し、我が国、いや世界的にも優位な技術力を駆使出来た事、改めて同校に對し感謝申し上げる次第である。三、老碁に非ず、

### 朗碁の余生を勤しむ

将棋、花札は小学六年生の頃、囲碁は高校時代に五目並べの延長として近所のおじさん達が楽しく打ち興じているのを見る事からルールを覚えたと記憶している。

本格的に囲碁を始めたのが、学生時代で全くの我流であった。当時は近所の早打ちマックのおじさん達や友人を負かすのが楽しみでアルバイトをし乍ら休暇の殆どを囲碁に打ち込み、麻雀もこの時代に覚えるに至った。

入社するや三交替実習期間中のある日、上司から誘われ深夜に及ぶ対局で見事連勝し、有段格だなど云われ自分もびっくりした次第である。

会社勤めの時代は社業の関係上、お盆や年末年始の休暇程度しか囲碁を嗜む事がなかった。

数次に亘る台湾、中国、韓国の出張先でホテルの支配人や商社の紹介者と夜を徹して勝ち碁を打った事、その御礼でご馳走に預かったこと、その喜びは今も忘れられない。退任までその棋友とは囲碁文化の交流として、ささやかではあったが懐かしいものであった。

退任が近づくとある日、入社当時負け知らずの上司(自称三段に昇格)と京都の碁会所で三十五年振りに対局するチャンスがあり対戦したが、何と私は三連敗を喫し黒石を持たねばならない羽目に至ったのである。私は、これではいけないと思ひ今一度勝ちを蘇らせる

事にした。即ち、初めて三冊の囲碁教書「攻めと守り」「囲碁打ち込み集」「三段挑戦の詰碁100」を入院中に繰返し解読し、また「詰め碁」や「次の一手」の新聞切り抜きにより上達法を学んだ。

その結果、退任二年後白石を取り戻す事が出来た。そして更に三年後には四目の置碁にまで棋力向上が得られた。因みに現在は「囲碁研究」を月刊誌として購読している。当時の上司は逝去され、局出来ない事、残念でなりません。改めて故人のご冥福をお祈り申し上げる次第です。

さて、老齡化社会が深まる老碁は、得てして見当違いの一手が飛び出し形勢が逆転する事が度々ある。「まあ、それでよしとする」そう思えるのが老碁の気楽さであり幸せの証と云えると思う。不利な場面からのやり直しと思えば、それ又楽しい。それよりも形勢好転で大変喜んでいる相手を見ると、何か良い事をしたような満足が得られる。内心負け惜しみを感ずるこの頃、これではいけない。

従って老碁に非ず朗碁として現在も勤しみ続けている「気力と棋力の向上をモットーに健全な精神力を培う特技も得られているのだから、又何よりもポケ封じを更に進める為にも今一度、ワンランク上を目指し頑張ってみようものである。

ともあれ朗碁を通じての多くの異業種定年の棋友は、まさに第二の人生の宝としたものである。そして遂に朗碁の讃歌として『四季の替歌』を扇子の片面に作詞し、裏面には座右の銘を記し、棋友と親睦会などで口遊む事になっている。

# 新任のご挨拶

電子情報デザイン学科

助教 谷口 一徹

二〇〇九年四月に電子情報デザイン学科に助教として着任いたしました。昨年度まで、大阪大学大学院情報科学研究科の博士後期課程に在籍しており、高性能かつ柔軟性を持つ再構成可能プロセスの設計最適化手法に関する研究により、二〇〇九年三月に博士(情報科学)の学位をいただきました。今年度より、教員として本学に着任したわけで、社会人としての第一歩を伝統ある本学で踏み出したことを非常に光栄に思っております。これまで、長い間学生をしていただくため、自分が「先生」と呼ばれることに最初は大変違和感を覚えました。最近は何とか慣れてまいりました。頼りない私を日々「先生」と慕ってくれる学生のお陰だと思っております。

私は、父が電気関係の仕事をしてきたことから、物心つくころから「電気」というものに非常に親しみを覚えておりました。その頃から、「自分は多分将来は電気の

仕事をやるんだろうなあ」と自然と考えておりました。そんな私が電子工学や情報工学の道に足を踏み入れたのは、中学校卒業後の工業高等専門学校進学時でした。私が中学生のころ、ちょうどWindows95が発売となり、コンピュータが一般家庭にも広く普及し始めた時期でした。同時に、携帯電話が広く一般に普及し始めたのもこの頃で、その基盤となる電子工学や情報工学という響きに「よく分からないけれども、何かすこすこ」と感じ、この道に進むことを決意したことを懐かしく思います。工業高等専門学校在学時は、電子工学から情報工学まで、とにかく専門の勉強が面白く、日々の学びが最先端の技術に少しずつ近づいていることを肌で感じるものが出来ました。

その後、更に専門の知識を深めたいとの思いから、大阪大学基礎工学部に進学し、今井正治教授の指導のもと組込み向けプロセスの設計手法に関する研究に従事しました。研究室に配属されてからは、研究のみならず、大学発ベン

チャーの立ち上げの手伝いや、企業との共同研究、他大学とのプロジェクトなど、さまざまな経験を積み重ねていただきました。特に、博士後期課程在学中には、二度にわたり計十カ月間、欧州ベルギーのマイクロエレクトロニクスに関する研究機関であるIMECに留学する機会をいただきました。留学中は、高性能・低消費電力な組込み向けプロセスのためのコンパイラ最適化技術に関する研究に従事しておりました。私が滞在していたIMECは、ヨーロッパのみならず、アメリカやアジアなど世界中から様々なバックグラウンドを持つ学生や技術者、研究者が集まっており、研究者の卵として同じPCUコースの友人たちと過ごした日々は非常に濃密で貴重な経験となりました。

ベルギー滞在中に、ローカルな学会に参加した時のことでした。ランチの時に隣の席に座ったところ、教授が、「最近、電子工学や情報工学を学びたいという学生が少なくなってきた」と言うのです。同じようなことを日本でも聞いたことがあったため、いろいろ考えてみたのですが、電子工学や情報工学が先人たちの努力により発展し、その発展により広く普及しすぎた結果、それらが「当たり前存在」になってしまったからなのではないかと考えるに至りました。私が中学生のころ、パソコンはまだ一部に限られた人のものだった。携帯電話もごく一部の人が持っていたにすぎませんでした。私はどちらも持っています。

白さを如何に伝えることができるかだと考えております。昔自分が抱いていた「よく分からないけども、何かすこすこ」というこの感動を、同様に下の世代に与えることこそが、科学技術を勉強してみよう、そして研究してみようという学生を一人でも増やし、世界最先端の研究成果を生み出すきっかけになるのではないかと思っています。そのような感動を与えるような研究成果を生み出すとともに、それに興味を持って歩き出した学生たちを徹底的にサポートすることが今の私にとっての使命だと思っております。この初心を忘れずに、本学への着任を機に、教員として、研究者として、そして人間としてひと回りもふた回りも大きく成長できるように、さまざまなことに積極的にチャレンジしてゆきたいと考えております。

これまでの自分の人生を振り返った時、私は非常に恵まれていたように思います。十代前半という多感な時期に、IT技術の爆発的な進歩を目の当たりにし、「当たり前でない存在」が劇的な進歩を遂げ「当たり前存在」になっていく、そのような過程においてさまざまなことを学ぶことが出来ました。だからこそ、ここまで興味を持って研究してこられたのではないかと思っています。

最後にになりましたが、立命館大学ならびに我が国の科学技術の更なる発展のため、微力ではありますが尽力させていただきます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願っています。

学生という立場から、教員、そして研究者という立場になった今、今後の自分に与えられた使命は、自分よりも下の世代に電子工学や情報工学、ひいては科学技術の面

最後になりましたが、立命館大学ならびに我が国の科学技術の更なる発展のため、微力ではありますが尽力させていただきます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願っています。

私にとっての立命館

横山 正人

(昭和五十一年卒)

六月に福岡で開催された立命電友会九州・沖繩支部の会合に久しぶりに出席しましたところ、指導教授でもあり、私たち夫婦の仲人でもある井上和夫先生がご出席されており、思いもかけない再会の機会を得ることができ、感激の中、楽しいひと時を過ごさせて頂きました。その折に、執筆依頼を受け、快くお引き受けした次第です。

現在、私は長崎総合科学大学に勤務しています。電気工学科を卒業後、企業を経験した後、再度大学院に戻り博士後期課程まであわせて九年間、立命館にお世話になりました。大学院を修了後、現在の大学の工学部電気工学科に着任したわけですが、いつの間にか長崎での教員生活も二十七年が過ぎようとしています。現在は、「環境・建築学部」で教育研究活動に従事しています。私の博士論文は、「聴覚心理情報を用いた音声分析に関する研究」というテーマで、信号処理と感性情報処理をドッキングさせた内容でしたが、企業や地方自治体と各種の共同研究や受

託研究を行っていく内に、最新の情報通信技術が地域課題の解決手段や地域づくりにどのように寄与できるかに興味を抱き始め、最近では、社会情報学の観点から条件不利益地域における地域情報化に関する政策研究や各種の実証実験に取り組んでいます。

さて、入学当初、医学部受験に失敗し、電気工学にそれほど興味もなく入学した立命館は、正直あまり楽しい場所ではありませんでした。大阪フィルの合唱団に入団したり、趣味の登山で北アルプスなどへ登山三昧の日々を送り、勉強面ではどちらかというと不真面目な学生の一人でした。電気工学に本格的に興味を抱き始めたのは、学部の後半以降だったような気がします。その後、趣味の音楽と電気工学の接点に関心を持ち、音声信号処理の分野で、卒業研究と修士課程は小堀富久夫先生の研究室に、博士後期課程は井上和夫先生の研究室にお世話になった次第です。現在と違って、大学院へ進学する学生も少ない時代でしたが、

毎日仲間と夜中まで研究室で過ごした日々が懐かしくもあり、現在の私のエネルギー源になっている気がしています。

大学教員になった今、立命館での勉学が私にとって大きな存在であったことを今更ながら実感しています。それは、立命館でお世話になった多くの先生方の教えや教授法が、まさに今の私の基盤になっていることに気付かされるからです。せっかくの機会ですので、私に大きな影響をお与えください。まず、私の指導教授でもあった小堀富久夫先生は、電気工学科で最も厳しい先生のお一人でした。実験レポートの口頭試問で泣かされた同輩もたくさんいらっしゃるかと思いますが、私も電子回路学の単位が取れず、二年間勉強させて頂きましたが、先生の厳しさがそれほど苦痛でもなく、むしろ大学の先生らしさを感じ、とても新鮮に感じたことを思い出します。これまで、私も電子回路学の著書を共著で三冊ほど出版させて頂きましたが、これも小堀先生の厳しいご指導の賜物だと深く感謝申し上げます。次第です。

次に、私の大学教員としての礎を最も築いて頂いたのが、博士後期課程の指導教授であった井上和夫先生です。小堀先生の退官を契機に移籍した私を快くお引き受け頂き、自由な研究環境をお与え頂いたことを、今更ながら感謝している次第です。毎週土曜日の研究成果報告会や日常的な研究指導、さらには研究予算の確保など、様々な点でお世話になったわけですが、無事博士論文をまとめることができました。現在、私の研究室にも大学院生や卒業研究ゼミ生が在籍していますが、井上先生からご教授頂いた手法や学生への接し方が、まさに私のお手本になっていることに改めて気付かされます。

さて、私は様々な地域活動に取り組んでいます。その中でシニアネット活動についてご紹介させて頂きます。「シニアネット」は、十数年前に米国で始まったデジタルデバイス正を目的とした民間活動です。今では、国内にも各都道府県に一つは類似組織が存在しますが、各々NPO団体として独自の活動を展開しています。長崎県でも立ち上げたいと考えた私は、八年前に「シニアネット長崎」を発足させました。当初、十三名で出発した組織も、今では平均年齢六十八歳、約百九十名の会員が所属する大きな活動組織になりました。シニア世代の生甲斐

づくりや社会参加支援、さらには地域コミュニティの再構築を具体的な目標に掲げ活動を展開しております。個々が蓄積してきた知恵や技術、ノウハウなどを相互に提供し合うことを基本にしており、情報通信関連の学習はもちろんですが、それぞれのノウハウを生かしながら様々な分野の学習やボランティア活動など多岐にわたります。この活動を長年やってきて感じることは、これまでの職業や経歴に依存しない、シニア世代の学びと社会参加の意欲の高さです。会員の居住地域は三市二町と広範囲ですが、ネットワークを通じた相互学習への意欲は驚かされるばかりです。会員からの声も生甲斐を感じ出した、友人の広がりが出てきたなど様々です。シニア世代の立命電友会の先輩諸氏も是非このような社会活動に参加されてはいかがでしょうか。

現在、長崎県校友会の会長を仰せつかっておりますが、二〇一〇年には福岡県でオール立命館校友会が開催されます。立命電友会の皆様方も是非ご参加頂きますようこの場を借りてお願い申し上げます。

# 立命館大学との出会いと今

岩田 徹

(平成七年卒)

私は、父の仕事の関係で転校の多い幼少期を過ごし、生まれた佐賀県以降、兵庫県西宮、大阪府高槻、と父が単身赴任を始めた小学校高学年頃までは転々とし、以後は滋賀県で育ち、比叡山高校を経て立命館大学に入学しました。

大学受験を迎えた際に将来の展望として、漠然と自分の家は勿論の事、色んな建造物を設計・建築して見たいと思っておりました。しかし当時は関西に建築系の学科は少なく、同じくらい電気製品に対する興味が強かった事から立命館大学の理工学部電気工学科を志望し入学した事を覚えております。

入学し衣笠キャンパスに通い始めて、学内で測量などをして居る方を見て「あっ立命館にも建築系の学科があったんだ！」と思った事を覚えております。現在の都市システム学科の前身である土木工学科です。

ただ、その頃には総合大学である他学部を含めたキャンパスの広さ、校舎数、人・出身地の多さなど、色んな事実が圧倒され、勉強面でも一般教養科目を含めて様々な新しい事に興味を広げていたた

め、転部などは考えませんでした。そんな中でもよく覚えているのは、一般教養科目を受講した校舎の名前です。上空から見た姿からも名前を暗示し以学館、時計台のある存心館など校舎の名前が非常に特徴的だった事、同時期から導入された一芸人試などを含む受験方式（これらの事情も含め他大学と比較しても特徴的な人材が多かったこと）などが、非常に印象的でした。

また衣笠キャンパスが、京都市内という事もあり、それまでは、あまり興味・見聞のなかった神社仏閣を知る良い機会になりました。一回生の途中で自転車を購入したことも有り、周辺の金閣寺、龍安寺はもとより、二条城、京都御所、本能寺、清水寺、哲学の道から銀閣寺など、その他に車でも伏見稲荷、嵐山、三千院など、色々と周りまわりました。更に夏には、地元と同級生に穴場などの情報をもらい、祇園祭り、鴨川納涼床、大文字五山送り火などを楽しみました。

また私は平成七年卒という年度であったため、四回生の一年間は、滋賀のびわこ・くさつキャンパスで過ごし、四月から新キャンパスに通う際には、現在の南草津駅は存在しておらず、草津駅からバスで通っていたことを覚えております。また当初は、理工学部と情報理工学部のみだったので、校舎なども現在の半分程度の規模だったように記憶しております。

正直なところ勉学面の方は、それなりの状態で四年間維持しつつ、勉学以外の事に大半の時間を費やしていたように思います。（学生の本分疎かでないに恥ずかしい限りですが……）

同じクラスの仲間を誘ってもらい二年間は、部活動に近い本格的な活動を行うテニスサークルに所属し、日々の練習や合宿で汗を流し、長期休暇には、友人と二人でプールの監視員をしたり、山中湖近辺のペンションに安い賃金（一日十〜十二時間働いて五千円）の住込みバイトに出かけたり（本当に安い賃金にも関わらず頑張ったと思います）、宿を予約せずに約一週間の九州旅行（何年か一度の大型台風が九州地方に接近する中、向かって行った事もあり大変でした）に行ってみたりと色々な事を体験しました。

しかし今から考えても色んな事を経験できたのは、あの頃だったからだと思えますし、貴重な経験を共にした友人は十五年以上経った今でも良い仲間です。私が三年間の専門科目で印象的

だったのは、電子回路と電気工学実験です。その影響もあり、講義を聞いていた教授の担当される卒業研究室を選択しました。その時の教授というのは、中西恒彦教授です。研究テーマとして「自動車交通流の計測」を掲げ、三人一組で、近くの京滋バイパスにビデオ撮影に行き、研究室で画像解析のプログラムを作成し、一定時間内の台数計測などを行い、分からない箇所の相談などをして、駅前まで親睦会という飲み会と一緒に参加してもらっていた事を昨日の事のように覚えております。

そして約十年前に結婚する際にも仲人を快く引き受けていただいた恩師です。今年五月に行われた退職記念祝賀会という貴重な場にも出席させていただきました。

現在、私は、住友電設株式会社勤めております。電気・空調設備、情報通信システム、通信システムなどの施工管理を主に行う会社です。

まず入社年度に第三種電気主任技術者の資格試験を受験しましたが、理論、電力、機械、法規の四科目あり、その中で理論、機械に於いては学生時代の専門科目で学んだ事が非常に役立つ初年度で全科目に合格できた事を覚えております。

また入社後八年間は、電気設備の施工管理部門に配属され様々な建築現場（薬品工場、地下鉄の駅

新築、博物館、高層マンション、大学、駅前再開発、遊園地など）で働き、九年目に社内で行っていたBPRプロジェクトに途中から参入する事になり、そこで構築したシステムの保守を含めて担当業務が急変し、現在は情報システム部に所属しております。

しかし今までの社内活動を振り返ってみても直接の上司等ではありませんが、要所で相談者・支援者は立命館OBでした（後から分かった事も多いのですが……）。そういう意味でも私と立命館との縁という物を日々感じております。

また技術系社員の私も六年程前から人事部の支援という形で母校を回って新卒の採用活動をしております。

その中でも当初から快くご指導・ご協力いただいたのが、中西恒彦教授でした。

また社内に二名の同級生が居るといふ事もあり、四年前から多々お世話になっているのが、高山茂教授です。この場をお借りして御礼申し上げます。

最後に若輩の私に立命電友会会報への貴重な寄稿依頼をいただき、懐かしい学生時代を振り返る良い機会を与えていただいた立命館大学と諸先生、そして立命電友会関係者の方々に深く感謝致します。

最後に若輩の私に立命電友会会報への貴重な寄稿依頼をいただき、懐かしい学生時代を振り返る良い機会を与えていただいた立命館大学と諸先生、そして立命電友会関係者の方々に深く感謝致します。

最後に若輩の私に立命電友会会報への貴重な寄稿依頼をいただき、懐かしい学生時代を振り返る良い機会を与えていただいた立命館大学と諸先生、そして立命電友会関係者の方々に深く感謝致します。

最後に若輩の私に立命電友会会報への貴重な寄稿依頼をいただき、懐かしい学生時代を振り返る良い機会を与えていただいた立命館大学と諸先生、そして立命電友会関係者の方々に深く感謝致します。

# 学生時代の回顧

## 正村直樹

博士課程後期課程一回生

私は、現在、電器メーカーでブルーレイレコーダーやプレーヤーの基幹部品となる青紫半導体レーザーの研究開発に従事しています。そして、博士課程後期課程に社会人入学し、仕事と勉強を両立させながら充実した毎日を送っています。二〇〇二年に、立命館大学理工学部電気電子工学科に入学してから、早いもので、八年が経過しました。当時、大学に入学したばかりの私に、今の自身の生活や仕事が想像できていたかといえば、少しも考えていなかったというのが正直なところです。大学入学から現在に至るまでの多くのかげがえない人との出会い、そして、価値観を覆すような数々の貴重な教えが現在の私を形作ってくれました。今回、自身自身を振り返る上でよい機会だと思ひ、稚拙な文章ではありますが、お話をさせていただきます。

が幸いして、専攻内だけでなく、専攻外または学外にも多くの友人ができました。その中で、多くの友人との出会いが私を人として大きく成長させてくれました。人付き合いが得意で驚くほど交友関係の広い友人がいました。確かに彼と話がはずんでいるような人でした。彼の優れているところは、口調の柔らかさや相手の意を一瞬に理解し、懐に入り込む能力であろうと思います。彼からはコミュニケーション能力を高めることの難しさや大切さを学びました。彼は、あんな他愛もない会話をしながら、将来ビジネスマンとして必要な駆け引きであったり、交渉力といったものを磨いてたのかも知れないと今になって思ひます。そして、大学の勉強以外にも自分の活動の場を広げたいと思ひ、サークル活動に参加していました。その中で様々な価値観を持った友人と出会いがありました。これまで、気の合う友人ばかりとだけ接してきた

私にとって、価値観の違うもの同士が協力してひとつのことを成し遂げるのがいかに難しいかを痛感しました。ある大会を企画した時のこと、女性のスタッフと大喧嘩したことがあった。私が仕切る役割を担っていたので、綿密に計画を立て、スタッフ一人ひとりに動き方を、すべきことを一つひとつ丁寧に指示しているときのことでした。ある女性スタッフが「一人ひとりの動きを全部把握したい。全員の動きを全部説明して！」と言いました。私は、「時間がもったいない。一人ひとりがすべきことをきちんとやればそれでいいんじゃないか」と反論しました。自分が立てた計画にも自信がありました。しかし、そのスタッフは一歩も引きませんでした。私は、洪々数時間かけて一人ひとりの動きと理由も説明しました。イベント当日、スタッフの一人ひとりが期待以上に能動的に動き、助け合い、スムーズに進み、イベントは、大成功に終わりました。このとき字んだことは、人に自分の考えを説明するとき言葉一つひとつを選ぶ大切さと順序立て話すことの大切さでした。また、相手を知ろう、理解しようと努力する姿勢であり、また、それを示すことなのだろうと思ひます。これは、現在私が日々の業務の中で多くの人々との

接する上で、今も大切にしていることのひとつです。

そして、何より今の私の生活に最も影響を与えているのは、三回生より始まった研究室での研究活動です。二十数年間勉強してきたものがやっと最後に何につながらのか少しわかったような気がしました。冒頭にも述べたように、半導体レーザーの開発の仕事をしていきますが、半導体内の電子の動きを記述するのに微分積分を使用するし、半導体レーザーから射出するレーザー光を記述するのにも微分積分の数式を使います。高校の数学の授業で初めて微分積分を習いますが、この数学の知識が将来の自分にどのように役立つかなど考えながら勉強している学生はほとんどいないのではないかと思ひます。少なくとも、私は、ただそこに解かなければならないらしいものがあつたから取り組んでいたというのが本心です。ふと、中学ころの卒業文集で「なぜ勉強しなければならないか？」といった少し小生意気なものを書いたことを思ひ出します。もし、いま、私が当時の自分に出会ふことが出来るのであれば、伝えてあげたい。「いま、君のした勉強がとても役に立っています。将来、必ず役に立つときがくるから、今は自分を信じて勉強を頑張りなさい。」と。

いま、私がこうして仕事としても大学の研究としても半導体レーザーを対象とするようになったのも、研究室配属時からご指導頂いている沼居先生との出会いがあったからに他なりません。研究室に配属されて間もないころ、授業でわからないことがあり、教授室を訪ねると、私の指導用にノートを準備していただいたうえに、一時間以上も高々一人の無知な学生のためにご指導いただいたことは今でも鮮明に覚えていきます。先生に感銘をうけ、ご専門である光子エレクトロニクスに興味を抱き、半導体レーザーを研究するようになりました。

人生は「縁」だと言いますが、まさしくその通りだと思ひます。学生時代に出会った一人ひとりが私自身に刺激を与え、人として大きく成長させてくれました。これからは人との関わりを大切にしていきたいと思ひます。

最後に、立命館大学で、学び、切磋琢磨し、成長できたことを心より感謝しております。また、研究の難しさと成長の場を与えてくださいました沼居先生をはじめ、ご指導、ご支援を頂いた先輩、友人、後輩、家族には、今後の自身の活躍をもって感謝させて頂きたいと思ひます。

平成二十一年度

「立命電友会九州・沖縄支部」の総会・懇親会開催

六月十三日(土)に、平成二十一年度の「立命電友会九州・沖縄支部」の総会・懇親会を、福岡天神から一駅の西鉄薬院駅近くの「紙与薬院ビル」で開催しました。第九回目を迎えた今回の総会、懇親会には、井上和夫先生(昭三十二年卒)に特別参加を、また学園の高山茂先生(昭五十九年卒)、立命電友会の新会長となられた南能寿会長(昭四十二年卒)、前会長の荒木敏氏(昭三十四年卒)、に参加していただきました。さらに当支部の設立にご尽力いただいた安田義彦氏(昭三十一年卒)にもお忙しい中、久しぶりに参加していただきました。

本年は紙与不動産株式会社のご協力により「紙与薬院ビル」を見学させていただきました。この建物は地下一階、地上十階、塔屋二階、延べ床面積約一万二千四百五十平方メートルのテナントビルです。二〇〇五年に起きた福岡県西方沖地震の後に建設されたこのビルは、積層ゴムのほかに、鋼ダンパーと鉛ダンパーの二つのダンパーを設け、耐震機能を高めた安心・安全を重視したビルとなっています。これらの設備は一般の人にはめったに目につくことのない設



備です。電気設備とは直接関係はありませんが最新・最先端の建築技術と、免震ビル特有の電気設備に関する施工方法などを見学できたことは大変興味深い有意義な内容であったと思われまいます。見学会後の懇親会は当ビルの近く「猫に鯉節」で開催。冒頭に新会長に挨拶をいただき、続いて井上先生から立命電友会会報(十九年十月)のレジメと恩師の窓(立命館大学校友会会報)つめいNo.235 二〇〇九年一月号・井上先生に関する辺見一男氏の原稿)をいただき、先生の学園生活を含めた今日までについての大変興味深いお話をお聞きすることができました。

楽しい時間とは瞬く間に過ぎるもので、話も尽きない中三時間ほどの時が過ぎ、来年も六月の第二土曜日に開催することを決めるとともに、再会を約束しつつ閉会、三々五々会場を後にしました。本年の参加者は、井上先生、南新会長、荒木前会長、高山先生、安田義彦(昭三十一年卒)、服部征記(昭三十七年卒)、後藤浩文(昭三十八年卒)、西一郎(昭三十八年卒)、鮎川清明(昭四十年卒)、村上富男(昭四十年卒)、前田隆(昭四十年卒)、西山興男(昭四十二年卒)、岡部千年(昭五十一年卒)、横山正人(昭五十一年卒)の皆様と森下(昭四十四年卒)の十五名でした。

早いもので来年は九州・沖縄支部も十回目を迎えることとなりました。皆様のご支援をいただき、目を盛り上げたといえ、おめでとうございます。多くの皆様に参加していただけたことを祈念しつつ本年の報告とさせていただきます。最後にあたりました。本会の開催にあたり案内状の作成・発信、名簿や名札の作成などのご支援いただきました電友会事務局の皆様にお礼申し上げます。(森下 明憲)

中西先生

退任記念祝賀会

今年の三月末日をもって、電気電子工学科の中西恒彦教授が本学を定年退職されました。中西教授は昭和四十四年に本学に着任され、その後四十年の長きにわたり、大学の発展・学生の指導にご尽力下さいました。中西教授の永年に亘る研究と教育指導に感謝申し上げますため、中西研究室の卒業生による退任記念祝賀会を平成二十一年五月九日にホテルグランヴィア京都にて開催いたしました。

当日は中西教授ご夫妻をお迎えし、研究でお世話になった先生方にもご出席いただき、研究室発足時から昨年度の卒業生に至る六十名近い出席者で盛大な祝賀会となりました。これも偏に、中西教授のお人柄、また、ご指導の賜物だと思われました。祝賀会は、来賓の先生による挨拶および乾杯で開宴となり、しばし歓談となりましたが、中西教授の周りには多くの卒業生が集まり、懐かしい思い出話や近況報告などに花が咲いていました。最後に、中西教授から近況報告を交えたご挨拶をいただき、全体での集合写真の撮影をもって終宴となりました。(記 田口 耕造)



同窓会だより

第六回七〇電友会

(昭和四十五年卒同窓会)

平成二十一年六月二十日(二十一日)にかけて恒例の七〇電友会を開催しました。場所は京都駅前「さと茂旅館」、出席者は先生五名を加えて総勢三十一名。

先生方には会費制でお誘いしたにもかかわらず、辻村、荻屋、井上、前田、中西先生がご参加下さいました。

同窓生は連絡先の判明している百七十九名に案内し二十六名が参加、関西圏のみならず長野県をはじめ、愛知、三重、岡山、広島県と遠方からも参加いただきました。宴は南原君の幹事代表挨拶、辻村先生音頭による乾杯から始まり、先生方、同窓生の近況報告と続くにつれ、次第に盛り上がりました。先生方からは、師として又人生の先輩として、我々に温かいお言葉をいただきました。そして南原君のユニークな指揮指導による校歌寮歌斉唱と進み中締め、二次会へと移行しました。

中西先生は本年三月に立命館を定年退職、前田先生(昨年三月)と荻屋先生(今年度末)は立命館大学の就業年齢規則(七十五歳ま

で)による退職になりますとのことであります。

同窓生は今や年金生活年齢に入。勿論今も現役でバリバリやっている方もおられますが、殆どの方はその生活環境は変化していません。関連会社に出たり、職が変わり週三〜四日勤務であったり、登山、テニス、旅行、詩吟、菜園、社会貢献等々自由を謳歌する自由人であったりとまちまちです。

関心事はやはり年金と健康、これからの時間の過ごし方、そして親の介護や子供の結婚、孫の世話と多義に渡っています。

七〇電友会は今回で第六回を数えますが、案内状を貰っても、なかには昭和四十五年電気科卒業同窓会という認識がない方もおられました。卒業当初は各卒研単位で同窓会をしていたのが、歳月と共に途切れがちになります、そうした時期に七〇電友会が発足し、最近では二年毎に開催しています。今回は二〇一一年六月です。同じ時代に生きた者が一同に会し、今をまた将来を語り合う事は同窓会をおいて他になく、今後の人生に示唆を与える貴重なものです。今回参加出来なかった七〇電友会学舎の友よ、今回は是非語らいたいものであります。

スナップ写真を全員分DVDに

コピーして頂いた奥村晃君、郵送して頂いた植木文治郎君有り難うございました。

次回幹事は山下努君、奥村晃君、玉置哲夫君です、宜しくお願います。(記 藤原 康彦)



第二回 南会長【活動報告】

六、平成二十一年三月二十日(金)

午後五時三十分から、立命館大学BK内ローム記念館三階レセプションホールに於いて、電子システム系卒業・終了記念祝賀会(電子システム系主催、立命電友会協賛)に出席し、祝辞を述べ杉本学系長、他諸先生方と歓談

七、平成二十一年四月一日(水)

午後二時から、京セラドーム大阪に於いて立命館大学・大学院入学式に出席

八、平成二十一年五月二十八日(木)

午後一時から、立命館大学BK内ウエストウイング二階電子システム系事務室内立命電友会事務局を訪問

九、平成二十一年五月三十日(土)

午後十二時三十分から、立命館大学BK内エポック21三階三一〇号室に於いて平成二十一年度立命電友会役員会に出席し会長挨拶と会長提言を行いました。

十、平成二十一年六月十三日(土)

午後一時から、立命電友会九州支部総会に出席

午前十時から、立命館大学BK内ウエストウイング二階電子システム系事務室横の会議室でワーキンググループ1(WG1)「事業関連」の作業部会会議に出席

会長挨拶と討論参加

十二、平成二十一年七月十八日(土)

午前十時から、立命館大学BK内エポック21三階三〇八号室に於いて(WG1)「事業関連」作業部会に出席

午後一時から、同上場所三階三〇八号室に於いて(WG2)「広報関連」作業部会に出席

十三、平成二十一年八月一日(土)

午前十時から、立命館大学BK内エポック21三階三〇七号室に於いて(WG1)「事業関連」作業部会に出席

午後一時から、同上場所三階三〇八号室に於いて(WG3)「財政関連」作業部会に出席

訃報

卒年	氏名	訃告
昭4	清水 明義	平成12年11月
昭14	小山 正三	平成17年9月28日
昭16	菊田 九郎	平成20年
昭18	富永 徳一	平成20年
昭19	市丸 健造	平成21年2月5日
昭20	松川 正	平成21年8月20日
昭22	藤田 元宏	平成17年9月

事務局便り

立命電友会会報三十四号の発行にあたり、ご寄稿いただいた皆様に対し、心よりお礼申し上げます。十月末には「第十回 立命大・関東立電会」が開催予定です。関東地区にお住まいの方は是非ご参加をお願いいたします。立命電友会では、会報に掲載する原稿を募集しております。ぜひご応募下さいますようお願いいたします。(宮林)

立命電友会連絡先

〒五二五-八五七七

滋賀県草津市野路東一―一

立命館大学理工学部電子システム系内

立命電友会事務局

高山 茂

宮林(月・木)

電話 〇七七(五六)二六六二

FAX 〇七七(五六)二六六三

E-mail: denyukai@ml.ritsumei.ac.jp

http://www.ritsumei.ac.jp/se/ry/denyukai/

(会報の題字は久保之俊氏)

昭24	俵 三九郎	平成20年11月
昭25	米田 稔	平成17年1月9日
昭29	北村 幸男	平成20年6月20日
昭29	保久原武次	平成21年3月
昭30	榊 輝男	
昭30	川村徳太郎	平成18年12月
昭32	豊嶋 恒則	平成20年
昭32	建川 良一	平成20年10月30日
昭33	竹谷 克己	平成21年5月16日
昭37	狩谷 弘	平成19年8月
昭38	小湊 信意	